美女と野獣？

ＲＡＮ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美女と野獣？

【Ｎコード】
Ｎ３３４０Ｒ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
「尾張のうつけ」と呼ばれる信長のもとへ嫁いできた濃姫。
それなりの覚悟を持ってやってきた彼女だが、実際に目にした彼は、さらにその上をいく覚悟が必要そうであった。

※サイト、ｄノベ転載

美女と野獣？【1】

今日は尾張へ嫁ぐ日。
尾張の「うつけ」と評される、信長のもとへ。
前日は、落ち着かなくてよく眠ることができなかった。
しかし、当日を迎えると、私の心は妙に冴え渡っていた。
ついに、この日を迎えた、と。

顔も知らぬ人の所へ嫁ぐのは、当たり前のこと。
だが、不安な心と、頭でわかっていることは違う。
どういう人であるのか知るために、様々な者に話を聞いてみた。
だが、出る話出る話、あまり印象の良いものはなかった。

従兄弟の光秀にも、話を聞いてみた。
「十兵衛は、どう思う？」
年も近かったので、彼は話しやすかった。
「結婚についてでございますか？」
「いいえ、織田信長についてよ」
「噂では、尾張のうつけ、という悪評は高いようですが」
「十兵衛まで、みんなと同じことを言うのね」
「私に何を期待なさっておられるのですか？」
帰蝶が期待はずれだと言わんばかりにため息をつくと、光秀は苦笑をもらした。
「十兵衛は視野が広いから、もっと別の見方を持っているかと思ったの」
光秀は、苦笑を柔らかい笑みに変えた。
「姫にそのような評価を頂けたことは光栄ですが、私は何分外の世界をあまり知りません。なので、皆が噂すること以上のことは知らないのです。事実は、その御眼にて確かめられる他ございません」

「えぇ、そうね。ありがとう、十兵衛」
身のある話ではなかったが、光秀と話すと、自然と帰蝶の心は軽くなった。

それはそれで、逆に蝮と言われる父を持つ私の心を燃えたぎらせた。
しかし、見知らぬ土地に行くことは、やはり不安だ。
そのような複雑な心を抱えていた。
それは周りにも伝わっているのか、侍女達も落ち着かない様子だった。

そして、今私はついに尾張のうつけがいる城にいる。
山を越える道の後、今は信長を待つ部屋に通されている。
着いたその日に祝言だ。

「信長様がおなりになりました」
その声と同時に、帰蝶が待っていた部屋の襖が開けられた。
勢いよく開けられたので、帰蝶は驚いて思わずそちらを見てしまった。
そこには、自分の手で襖を開けた、青年の姿があった。

――これが、信長……。

美女と野獣？【2】

「お前が、美濃の姫か」
信長は、目の前にいた見慣れぬ人物をみとめて、声をかけた。

「は、はい。帰蝶にございます」
帰蝶は慌てて、信長に対して姿勢を正し、腰を折って、手をついた。

「今はまだ楽にしてていい。長旅で疲れただろう。どうせ後でまた疲れるのだから、祝言の儀が始まるまでは楽にしていろ。少し様子を見にきただけだ。蝮殿の娘がどういう者なのかを」
最初は優しげな言葉のように聞こえたが、最後の部分だけ、何か棘を含んでいるように聞こえた。
そう思うと、浮かべている笑みも意地の悪いもののように見えてきた。
帰蝶は、目を鋭くした。
信長もそれを察したのか、笑みをますます濃くした。
「それでは、また後ほど」
信長は、そうして部屋を出て行った。
何やら穏やかでない空気が二人の間に流れたので、周りの者は、心配げに帰蝶と去った信長を見ていた。

祝言は滞りなく行われた。
うつけと言われる信長ではあるが、この場ではそのうつけ具合は発揮されはしなかった。
だが、酒を飲む仕草がぎこちなかったので、下戸かもしれない、と帰蝶は感じた。

光秀が、同じような仕草をだったのを思い出したからだ。
その顔も、どこか強張っていた。
自分の気持ちを隠すのは、あまり上手な人ではないのかもしれない。
帰蝶は、何となくそこに好感は持てた。
尾張のうつけに、何となく親しみやすさを感じた。

そして、初夜である。
祝言の後なのだから、この夜が訪れるのは当たり前なのだが、帰蝶は緊張した。
どこに嫁いだ女も、この夜が一番緊張するだろう。
夜になると、人間はその本性を現すことがある。
尾張のうつけが、どのような本性を現すのか。

「入るぞ」
その声と同時に、襖が開けられ、浴衣を着た信長が入ってきた。
帰蝶は、布団の横に静かに正座していた。
信長は帰蝶に近づき、その前に片膝ついた。
帰蝶は少し怪訝な顔をして、信長を見た。
信長は、その帰蝶の表情を見てから、口の端をそっと持ち上げて笑みを浮かべた。

「そう堅くなるな。今日は、何もせんよ。疲れた顔をした女を抱いても面白くないからな」
「な……！」
信長がからかうような笑みでそう言うと、帰蝶は顔を真っ赤にして、思わず何か言いそうになった。
「何だ？」
信長はそれを待っていたかのように、帰蝶の言葉の先を催促した。
愉快そうな信長の笑みに、帰蝶は釈然としないものを感じるもの

の、素直に口を開くことにした。
信長の不興をかっても、自分が不利なだけだ。
「……上総介様は、随分と女性の扱いに手馴れているようですね」
しかし、ただ返すのも癪だったので、わざと皮肉を言った。
それを聞くと、信長は笑みを引かせ、帰蝶の目をじっと見た。
帰蝶は、緊張した。
このように目線を合わせたのは、そういえば今が初めてだ。
信長の目は、あまりにもまっすぐで、深くて、帰蝶は夜の暗闇に一人残されているような気分になった。
しかし、すぐに信長はまた表情を緩めた。
「俺は、女と寝たことはない。だが、たまにここを抜け出して、町に行くことがあるんだ。そこで、色々なものを見た。そこで得た知識だよ」

――何を見てきたのやら……。

帰蝶は、その言葉に少し呆れる思いがした。
そして、その反応さえも楽しんでいるような信長に、ますます呆れた。
まるで、子供のようだからだ。
帰蝶のことを、新しく来た遊び相手とでも思っているのだろうか。
そう思うと、帰蝶は急に腹立たしくなった。

「上総介様もお疲れでしょう。今夜はもうお休みになりましょうか」
やや語気を強めて、帰蝶は布団をめくって、信長に勧めた。
信長はその顔に浮かべた笑顔は変えず、布団にあった帰蝶の手に自分の手を重ねた。
帰蝶は、驚いて信長を見た。
浮かべている笑顔は、帰蝶に挑むようだった。

「気を悪くしたのなら謝る。蝮殿の娘よ」
帰蝶は、手を強く振って、信長の手をといた。
そして、信長を鋭く見据えた。
信長はすぐに手を戻した。
「私には帰蝶という名があります」
「きちょう、か。蝶は人に夢を見せるらしいな」
「……は？」
信長が静かに呟いた言葉に、帰蝶は意味がわからず思わず声をあげた。
しかし、信長はそれに答えることはなかった。
「その名では呼びづらい。美濃から来た姫だから、お濃と呼ばせてもらおう。では、妻の勧めに従って、素直に　今夜は寝ることにしよう」
そう言うと、信長は布団の中に入った。
帰蝶は信長の上に、静かに布団をかけた。
本当なら、この布団を勢いよくかぶせて、息を止めてやりたい気持ちだったが、それは抑えた。

――何なのだろう！　この男は！！

帰蝶は、腹が煮える気持ちと闘いながら、信長の隣に横になって寝た。
彼女の心とは違って、その日の夜は、晴れ渡った、静かな夜だった。

＊＊＊２００７／５／２２＊＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3340r/

美女と野獣？

2011年5月13日18時10分発行